

総合的な学習の時間（以下、総合学習）を今年度から全面的にリニューアルして、地域との交流活動やボランティア活動を積極的に、社会貢献できる生徒の育成を目指している宮城県石巻好文館高校の取組を紹介する。同校は創立102年の伝統校で、2006年に男女共学となり、石巻女子高校から校名を変更した。各学年5クラスで、全校生徒数581名の進学型単位制高校である。

同校のある石巻市は、東日本大震災では震度6強、津波の高さ8.6メートルであった。同校は湾からは2キロ以上離れているが地震発生1時間後には津波が襲い、浸水がはじまった。水位はみるみる1メートルを超え、在校生、教職員600人と地域住民1000人は3階に避難した。校舎の周囲が水没し3日は孤立状態となり、窓ガラスに赤い文字で「SOS1600人」と書き救助を待った。当時を知る渡邊伸明教諭は「生徒は不安だったと思いますが、率先して避難誘導をしていました。お年寄りの多い地区なので、3階に避難するのを助けるためにお年寄りを背負っていましたよ。水が引いてからも校舎や体育館

甲斐ある人と 言はれなむ

監修 田村 学（文部科学省教科調査官）
取材・文 廣瀬志保（山梨県立高等学校教諭）

地域活力の源！
輝け高校生

「総合的な学習の時間」
が地域を変える

第11回

の泥の撤去作業をよくやっています」と話す。2カ月後の5月にやっと授業が再開した。

**新将来構想委員会で総合学習の
リニューアルを提案**

男女共学がはじまって6年がたった2012年度、将来構想委員会は学校の進むべき方向について改めて考えはじめた。「自発能動」を校訓の一つとしているが、生徒の自発性・主体性がなかなか育っていない現状があったからだ。学校全体として「自発能動」にふさわしい生徒を育成するにはどうしたらよいか検討がはじまった。新将来構想委員会の委員は教頭、主幹教諭、各学年から2名の計8名である。各学年からの2名の教諭は自主的に手を挙げたメンバーで30代が5名いた。

委員会では、まず学校の現状分析を行った。課題、強み、何をしていくべきか：課題を克服するためには、授業、生徒指導、部活動など教育活動のあらゆる面での努力が必要であり、そのための教員間の共通理解が必要であった。改善のアイデアは広がったが、現実的にできることを考える中で、「授業改善」が焦点化された。複数の教師から「主体的な

学習力を伸ばしたい」という意見が出されたのだ。委員以外の職員にも会議ごとに進捗状況の報告を行い、パブリックコメントを求めた。そして「一点突破、全面展開」ができるのは総合学習のリニューアルだということになった。教職員全員の共通理解のもと、総合学習のカリキュラム改善を行い、探究型にしようという方向性が定まった。

改善のポイントは「①生徒が自分で選び自分で考え自分で動き自分でチャレンジできる場の創出②感動・活躍・充実の場の創出③『生徒が変わるために、我々教員こそともに変わらなければならない』という意識の共有④企画運営主体は、新分掌を立ち上げる」の4点であった。さらに名称を校是である「甲斐ある人と言われなむ」(真心を持って、世のため人のために尽くす人になるように日々努力する)になぞらえて、「甲斐ある人といわれたいむ」とした。

具体案を作る段階では生徒や学校の実態を勘案した。生徒たちは、東日本大震災で多方面から多大な支援を受けたが、その感謝の念をかたちに表したいという思いの発露が見ら

れた。また、教師には、校是の「甲斐ある人と言われなむ」を体現するためにもボランティア活動に取り組ませたいという思いがあった。単なる体験活動にとどまることなく、多様な情報を収集しながら他者と協同して見通しや計画を立て、実践・評価・分析をして成果をまとめ、表現するという一連の活動と、グループワークや地域の方々との交流によって、たくましく社会を生きていくのに欠かせないコミュニケーション・スキルも育成したいと全体計画が作成された。1・2年前期は「ボランティア活動」、1年後期は「在り方・生き方研究」2年後期は「分野別課題研究」、3年は「学校行事活性化企画」である。

自発的・主体的な取り組み

1・2年生前期は縦割りで行う「ボランティア体験活動」である。本年度は初年度であったため、もともと縦のつながりのある部活動を単位とした。

4月には石巻社会福祉協議会地域福祉課の渋谷秀樹課長を講師に招きボランティア活動の概要を聞き、石巻市内でボランティア活動

を展開している小林深吾さんからは実際の経験を聞いた。その後、部活動単位の中をさらに5人ほどの小グループに分け、自分たちが行ってみたいボランティアやその内容、期待される効果などを話し合った。

5月には部活動ごとに小グループで話し合われた意見の集約を行い、実施内容・実施しようとした思いや考え・期待できること・計画の流れなどを決め。ボランティア計画書を作った。普段の部活動を生かした取組を考え、計画を立てた部もあった。家庭生活部は仮設住宅を訪問し、ペーパーサート(紙人形劇)、編み物、シユシユ作り、草取りを企画した。震災後、生活が一変してしまった方々とささやかではあるが和める時間をつくりたかったからだ。

ボランティア当日は引率教員がいない。その分、計画は細部まで検討することが要求された。体験寸前には、炊き出しを考えていた三つのグループがコンロや鍋を運ぶことが困難だとわかり、計画を変更した。あくまでも生徒だけで実践できることが前提である。この他、事前学習では、活動中の態度や連絡報

告、積極的なコミュニケーションを行うことなどについても確認がされた。

7月19日、ボランティア体験活動の当日である。40グループに分かれて、福祉施設の訪問、保育園での園児とのふれあい、地域の清掃、農作業の手伝いなどを行った。

女子バスケットボール部は地元のみまわり保育園を訪問し、桃太郎の演劇と草取りをした。桃太郎の劇は、鬼ヶ島の戦いで鬼が勝利するストーリーにした。その時、園児が鬼めがけてボールを投げて成敗し、桃太郎を助けるという園児参加型の構成だ。ボールは当たっても怪我のないように新聞紙を丸め、キラキラシールで巻いて作った。ナレーターを務めた2年生の木村こころさんは「私自身も楽しむ気持ちで臨んだ。園児の笑顔を見て、人の役に立てるのがうれしくなった。社会に貢献したいので将来は看護師になりたい」と実践の感想と将来について話してくれた。ひまわり保育園の宮崎佐知子主任保育士は「ボランティアとしての受け入れははじめてでした。園児が劇を楽しんだのはもちろんですが、お姉さんたちが園内や隣の老人ホームの

草取りをしている姿を見て興味を示した姿が印象的でした。継続してほしいです」と話す。

音楽部は野蒜^{のびる}海岸の清掃を行った。震災以降、海に近づくことが少なくなっていたが、海岸を活気づけたいと海岸の清掃をすることにした。2年生の木村はるなさんは「野蒜海岸も昔のように海開きができて、地元の人にも海に行ったり、海水浴に行ったりできるようになってほしい」と話した。

マンドリン部は東松島市小野駅前地区応急仮設住宅を訪問し、「天城越え」や「チェリー」を演奏した。集会所は入り口まで人があふれ、大きな拍手に包まれた。仮設住宅代表の武田文子さんは「初めて大勢の高校生に訪問していただきうれしかった。マンドリンの演奏を聴いたのもはじめてで大変感激した」と語った。

8月からはボランティア実践のまとめと、体験を踏まえての調査・研究が行われ、グループごとに発表をした。ポスターには、実践内容、感想や発見したこと、他、今回の活動が漢字一文字で表わされていた。発表後は40グループのポスターが廊下に掲示された。

漢字一文字を「躍」と表現したのは、応援同好会グループだ。インターナショナルプリスクール・ピノッチオを訪問し、チアダンスを披露し、園児たちと一緒にチアダンスも創作した。事前に作ったボンボンをプレゼントして、園児になじみ深いドラえものの曲で踊った。「躍」を選んだのは、実際に踊ったことに加えて、活動が心躍るものだったこと、そして、これをきっかけに未来に向けて躍動したいという願いを込めたからだ。

9月の決勝大会には代表10グループが臨み、体育館の大スクリーンを使ってプレゼンテーションが行われた。訪問交流したグループも清掃活動したグループもそれぞれの思い入れや工夫が見られた。

男子バレー部は、「汗」の字を写しだし、いまだ再開していないJR仙石線の駅付近のゴミ拾いを行ったこと、橋の下にはペットボトルや放置された家電などがあったことを伝えた。清掃活動を通して環境問題について深く掘り下げ、3R (Reduce: 排出抑制、Reuse: 再使用、Recycle: 再資源化) から4R (プラスRefuse: 発生回避)、特にrefuse



応援同好会のボランティア活動

を重視すべきだと提案した。

プレゼンテーションをした1年生の佐藤優太くんは「全国からボランティアに来てくださった方々のおかげできれいになった道路に、ペットボトルや生活ゴミなどがあるのは申し訳ないです。多くの方の思いを受け止め、今度は僕たちが復興を支えていきたいと考えました」と体験とその後の学びから感じていることを話した。

主幹教諭の岡崎拓生教諭は「話し合いや体

験活動から、生徒の主体的な取組をしている姿が見られました。アンケートからも生徒の意識変化が見られます。地域の関心も高く、地域と高校の交流の機会をもっと増やしてほしいという声が上がっています」と語る。

「一点突破、全面展開」

1年生の後期は「在り方・生き方研究」である。自分史を振り返りシートにまとめ、興味ある分野について探究する。国会議員や会社経営者、行政書士、NPO法人理事長など様々な分野で活躍している21人の外部講師から、生徒8名ほどで話を聞き、疑問に感じていることを質問した。社会の仕組みや、人生哲学を聞き、その後の授業では外部講師からの学びをまとめ、グループ単位で発表した。今後は各クラスでの討論会が行われる。

2年生の後期は「分野別課題研究」で興味のある分野についてゼミ活動が行われている。教育学、生活科学、文学歴史学、代数学、地域学、物理学のゼミに分かれ、研究テーマを絞るために車座になり討論したり、文献を読みあつたりした。10月に行われた中間発表

では研究の動機、目的、内容、調査方法、予想などが発表され、1年生も聴講した。金子由芽さんは「デザインを中心とした地域活性化について」と題して町づくりについて話した。11月には大学教授15人を招いて、課題研究についての示唆をもらった。現在はさらに探究を深め、3月には全体発表会を行う。

3年生は「学校行事活性化企画」を行う。今年度は中学生の一日体験入学の企画をクラス単位で考えた。学校生活のスライド、部活動のプロモーションビデオを作り、500名超の中学生とその保護者に披露した。その後、出身中学校の中学生との懇談会を行った。

須藤尚教頭は「リニューアルした総合学習の中で、今まで見られなかったような生徒の生き生きとした意欲的な表情や姿勢が、いたるところで見られました。この機会を何とか生かそうとする生徒の熱も感じます。全生徒全教員が試行錯誤して懸命に取り組んだ成果です。しかし、リニューアルのねらいは『一点突破、全面展開』です。ここから、あらゆる教育活動の場面に、きらめく主体性を生み出していききたいと念願しています」と語る。